様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月３１日現在

機関番号：16401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０５８６
研究課題名（和文）御影石製中世石造物の分布調査とその学際的研究－中四国・九州を中心に－
研究課題名（英文）A survey of the distribution of medieval stonework make from granite and their interdisciplinary study －Chugoku, Shikoku, and Kyushu as a study region－

研究代表者
市村　高男（ICHIMURA TAKAO）
高知大学・教育研究部総合科学系・教授
研究者番号：８０２９４８１７

研究成果の概要（和文）：私たちは中四国・九州地方を中心に、御影石製の中世石造物がどのように分布するのか学際的な研究を行った。そして、①御影石の産出地を中心とする地域の他、四国西南部、九州北部、山陰西部などに高密度で分布する、②瀬戸内海沿岸には、他の石材で造られた石造物が広く分布し、御影石製石造物はあまり見られない、③御影石の石工たちは、他の石材の石工との競合を避けて営業していた、などの事実を解明した。

研究成果の概要（英文）：We did an interdisciplinary research on the distribution of medieval stonework make from granite. The study region is Chugoku, Shikoku, and Kyushu. We clarified the following. ①It is in a high density distributed in the Shikoku southwest part, the Kyushu northern part, and the Sanin west part, etc. besides production ground and the surrounding area of granite. ②The stonework made from other stone is widely distributed in the Inland Sea coast, and the stonework make from granite is not seen so much. ③Masons who process granite avoided and were doing business the competition with the masons who process other stone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：中世石造物、御影石、石材識別、分布調査、海運、流通

１．研究開始当初の背景

（1）石造物研究が急速に進展を遂げ、日本史学や考古学の補助学問から自立の兆しを見せるようになったのは、たかだかこの 10 年くらいのことであった。研究の進展とともに、石造物研究会という研究組織も発足し、一見すると順風満帆の歩みを開始したかに見えたものの、歴史の長い日本史学や考古学とは異なり、この分野の研究は、在野の研究者が各地で孤立的な活動を展開している場合が多く、その成果が広く提示されていない場合が多かった。

今から数年前、そうした各地の研究者を結集し、それぞれの成果を共有しながら、異な

る立場や視点から意見の交換を進め、さらには他地域との比較・検討を試みることによって、研究の方法論や目的を明確にすることが不可欠な段階に到達していた。

(2)そのような折り、2007 年度までの科研費による調査・研究(基盤研究(C)海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究、代表者・市村高男)の研究計画推進過程で、摂関家領土佐国幡多荘に御影石を石材とする石造物がかなり濃密に分布することが明らかとなった。御影石製石造物が広域流通品として西日本に広く分布していることは、それまでにも知られてはいたが、幡多荘における分布の有り様は、本場の摂津国などを除けば西日本随一を誇っており、交通不便なこの地域になぜそのように多数の御影石製石造物が搬入されたのかが、大きな課題として浮上した。

(3)そこで私たちは、御影石の産出地である六甲山に隣り合う摂津国福原荘が一条家領荘園であるという事実に着目した。この御影石の生産地と同じく、消費地(分布地)である幡多荘もまた一条家領の荘園であることより、瀬戸内海の要港・兵庫津から瀬戸内海－豊後水道を経て幡多荘の西海岸に至る「海の道」の重要な役割を再評価し、改めて海運・石材流通という視点から御影石製石造物について検討することが必要となった。

(4)　また、これまでの石造物研究では、石材に着目することが少なかったが、この面からの検討を深めることによって、海運･流通論や石工とその加工技術、寺院･宗教者と石工、供養主と石工など、石造物研究の幅とすそ野を大きく拡げるとともに、新たな方向性を提示できることも分かってきた。

(5)そこで私たちは、土佐国幡多荘地域に高密度で分布する御影石製石造物が、御影石の流通・分布する西日本全体の中で、どのような位置を占めているのかを明らかにしてみることにした。そのために、中四国・九州各地に分布する御影石製石造物の全貌を把握すべく、分布調査を推進し、生産地と消費地とをめぐるモノの移動という視点から検討することにした。各地で地道な活動を展開する石造物研究者との連携は、こうした課題設定のもと、人と人の輪の拡がりを通じて自然に形成されることになった。

２．研究の目的

(1)中世の石造物の中で、広域流通品として知られているのは御影石(六甲花崗岩)と日引石(凝灰岩質安山岩)で造られた石塔類である。本研究においては、畿内系石造物の代表であり、研究動機の一つともなった土佐国幡多荘地域に高密度で分布する御影石製石造物に焦点を絞り、生産・運輸・消費という主として経済面から検討を進めることにした。

(2)そのための基礎的作業として、西日本で活発な活動を展開する石造物研究者の協力のもとに、中四国・九州地域に広く分布する御影石製石造物の分布調査を実施することにした。それによって、これまで知られていた御影石製石造物の分布状況をより正確に把握するとともに、その分布調査の結果を踏まえて、新たな御影石製石造物の分布図を作成し直す。

(3)ついで、その分布図の読み込みを通じて、御影石製石造物の分布状況の地域的・時代的な特徴を読み取るとともに、それらが持つ社会経済的な意味、そして宗教・文化的な意味について具体的に検討を進めていく。

(4)それを踏まえ、①御影石製石造物が生産地から消費地へ輸送される方法や流通経路を解明する、②絶対数が少ない中世前期の生産地と発注者との関係を多面的に検討する、③個体数が急増する中世後期の生産や輸送体制の有り様、仏教の在地への浸透に伴う石塔類の需要拡大、需用者層の変化を伴う増加の意味など、多面的な検討・考察を試みる。

(5)以上の検討と考察を踏まえて、個体数が膨大である石造物が持つ歴史資料としての可能性を広く提示するとともに、各地における石造物の悉皆調査の機運を高め、その保護・保存と研究への取り組みが加速するよう、その基礎固めを目指す。

３．研究の方法

(1)原則として関係者全員による研究会・見学会と畿内・中四国・九州などの班ごとに実施する調査、1～3 人の少人数で行う調査を基本的スタイルとして研究計画を進めた。

(2)全員による研究会・見学会は、1 年目に御影石の本場である兵庫県加古川市・神戸市・芦屋市等と三田市・芦屋市・西宮市・宝塚市等とで１回ずつ実施し、中国地域で最も高密度で分布する島根県益田市でも１回実施し、御影石を他の花崗岩から客観的に識別するにはどうすればよいか、その方法・視点などについて検討し、分布調査の方法を固めた。

(3)御影石を他の花崗岩から識別する方法は、目視と近接写真を撮影しての岩相観察(色調と結晶・粒子など)、帯磁率の測定値の比較・検討、石工の加工技術による形態・様式の比較・検討、宗教的・歴史的背景からの検討などによって総合的に判断することにした。こ

れは、石造物が文化財であるため、非破壊による方法の範囲内で最良の調査・検討を進めよう、という意図によるものである。

(4) ２年目は、御影石か否かの識別が難しい花崗岩石造物が分布する山口県山口市・下関市等で研究会・見学会を１回実施し、石工そのものの移動や技術の伝播を考えることの必要性を再認識するとともに、それをこれ以降の分布調査の視点・方法の中に組み込んでいった。もう一回の研究会・見学会は、御影石製石造物の本来の分布圏が、どこまで拡がっているのか、その西側の境界領域を探るべく、兵庫県高砂市・姫路市・加西市等で開催した。

３年目は、山口県と関門海峡を挟んで対岸に位置する北九州市・福岡市・太宰府市など福岡県北部地域で研究会・見学会を１回実施して、両地域の関連性を具体的に考え、もう１回は、兵庫県などを除けば西日本で最も高密度で御影石製石造物が分布する、高知県土佐清水市・四万十市等で実施し、御影石の生産地から離れた地域に大量輸送された意味を検討してみよう、ということになった。

(5) この間、畿内・中四国・九州などの班単位、また少人数の追跡調査や新たな所在の確認調査を継続的に実施し、その成果を踏まえながら、それまでに知られていた御影石製石造物の分布の有り様を、より正確なものに書き換えていった。確認した御影石製石造物は、小さな細片まで含めて考えれば、当初の予想を遙かに超えていたため、実測等の作業は主要なものに止め、その分布の意味を考える上で不可欠な分布図の作成を基本として、整理を進め、考察していくことにした。

(6) 15 世紀以降、とりわけ 16 世紀になると、御影石製石造物の個体数は急増し、１点ずつの実測調査は事実上不可能であるため、13 世紀から 14 世紀のものは丹念に調査し、15 世紀以降のものは個体数を概算で把握し、どこにどの程度の密度で分布するのかを確認することに重点を置いた。この二つの作業を通じて、15 世紀が石造物の大量生産・大量諸費の時代の始まりであることを示すことができるとの見通しを立てた。

(7) 各地での調査と研究会は、できるだけその地域の教育委員会や研究機関と連携して実施した。初年度は、兵庫県立人と自然の博物館のお世話になって研究会を実施し、島根県益田市では市教育委員会の協力のもと、見学会・研究会を実施するとともに、その成果を多くの市民に還元すべく、市民講座の一環として講演会をおこなった。

２年目は山口市・下関市の両教育委員会と連携して研究会・見学会を実施し、下関市立考古博物館で、その成果を市民に還元する講演会を開き、また、愛媛県伊方町では、町教育委員会との共催で、シンポジウムを開き多くの市民に地域の再評価の機会を提供した。

また、３年目には徳島県海陽町教育委員会、高知県東洋町・四万十市教育委員会と連携し、調査を実施してその成果を共有した。四万十市では、市教育委員会と共催でシンポジウムを開催し、石造物の面から見た当該地域の重要な位置について明らかにした。

このように、教育委員会等と連携して調査を進めたのは、各地に残る膨大な石造物の資料的価値・文化財としての価値を各地の自治体が認識し、主体的な調査や保護行政への取り組みを促すためであり、これによって石造物研究の基礎となる分布調査の進展を期待したためであった。

４．研究成果

(1) 本研究では、各地の石造物研究者の協力の下に御影石で造られた中世石造物の分布調査を進め、古川久雄氏の先駆的な御影石製石造物の分布図を塗り替えていくことに成功した。

それによれば、御影石製の中世石造物は、御影石産出地の六甲山から近畿圏を中心に広く分布しており、とりわけ瀬戸内沿岸地域から北部九州、五島列島、四国東南部、四国西南部、石見西部などには高密度で残存する。さらに分布密度は低いが、九州東岸地域の豊前から南の日向・大隅まで、そしてその延長線上に種子島へも搬入されていたことが改めて確認された。

今回の調査対象地域は、中四国・九州であったため、近畿地方からその東側の調査は実施しなかったが、分布地域の中心は近畿の西部が中心であることは確実であり、それ東側は微々たるものと考えてまず間違いはない。

(2) 近畿からその西側の地域の分布状況を見ると、産出地の六甲山周辺から播磨中部までが、御影石製石造物の分布圏の本体部分にあたるといってよい。

この分布地域を除いて観察すると、高い密度で分布するのは、土佐西部の幡多地域のほか、長門下関、北部九州の宗像周辺から博多・太宰府周辺にかけて、そして石見西部の益田を中心とする地域、四国の阿波南部など、いずれも御影石の産出地から遠方にあたるところであった。すなわち、石材の産出地から同心円的な拡がりは一位認められない。その一方で、播磨西部から安芸にかけて、讃岐・阿波北部・伊予中東部などの瀬戸内沿岸地域、そして西部を除く山陰地域は御影石製石造物の分布が希薄であり、御影石製石造物の空白地帯といいうるところであった。

(3)この空白地帯について見ると、播磨西部では竜山石製石造物が分布し、備前・備中・備後・安芸と伊予には別の花崗岩で造られた石造物(芸予系花崗岩石造物)が分布しており、また、備前・美作には備前系石造物、備中南部には備中系石造物が分布している。また、讃岐と阿波北部は、讃岐産の凝灰岩(火山石・天霧石)製石造物が圧倒的な密度で分布し、備中の中北部では地元産の石灰岩で造られた石造物が高密度で分布し、山陰中東部でも他の花崗岩製石造物の分布が見られた。

これらの事実から、御影石製石造物は、地元産の凝灰岩・石灰岩、そして他の花崗岩で造られた石造物が広く流通する地域には、ほとんど搬入されなかったこと、しかも、これらの地域では御影石ばかりか、地元産の石以外で造られた石造物の搬入も許容しない指向性があったこと、などを容易に読みとることができる。すなわち、御影石を加工する石工たちは、石造物の流通で競合する可能性が高い地域には、敢えて進出しなかったのであり、また、特別の場合を除いてそこに製品を送り込むことを強行しなかったのである。そこには石造物生産者たちの明確な棲み分けがなされていたと見なすことができよう。

(4)これは、御影石製石造物があまり流通しなかった九州の中部・南部においても同様であった。この地域では、阿蘇・雲仙・霧島をはじめとする火山から生まれた各種の凝灰岩が広く分布しており、さらには砂岩や結晶片岩も産出することから、早くから磨崖仏や石造物が造られていた。とりわけ阿蘇の溶血凝灰岩は、加工のしやすさと持ちの良さから重宝かられ、石造物の石材として多用された。

北部を除く九州では、御影石の産出地から遠方に位置するばかりでなく、この阿蘇の溶血凝灰岩をはじめとする多様な凝灰岩類で多様な石造物が造られていたため、御影石製石造物が流通する余地がなかったのである。

豊前・豊後・日向・大隅には僅かながらも御影石製石造物の分布が認められるが、その多くは律宗寺院間の繋がりによってもたらされたものや、権力者が自らのステータスシンボルとすべく特注したものと見なされる優品ばかりであった。その点からいえば、この地域に分布する御影石製石造物は、むしろ特殊な事例に属するもの、と評価しうる。

(5)高い密度で分布する地域は、その内実から大きく分けて二つに分けることができる。一つは、土佐西部の幡多地域、阿波南部地域であり、もう一つは長門下関とその周辺、宗像周辺から博多・太宰府周辺にかけての地域、益田を中心とした石見西部、そして平戸や五島列島である。

前者は、土佐幡多地域のように地元産石造物の存在がほとんど確認されないところ、阿波南部のように古くから板碑造立の伝統はあるものの、五輪塔や宝篋印塔・宝塔などの石造物制作の伝統がないところであった。

これに対して、後者はいずれも海上交通の要地であり、地元産の石造物もさることながら、各地域を往来する人やモノの動きの一環として、多様な地域から多くの石造物が搬入され、それをさしたる抵抗もなく受け入れていたところであった。すなわち後者は、瀬戸内沿岸中央部のように、他の石材やそれを加工する石工との共存を望まない地域とは異なって、広く受容する開放的な社会性を有した地域であったといってよい。

(6)土佐幡多地域は、六甲山周辺から畿内にかけての御影石製石造物本来の分布圏を除けば、西日本第一の高密度分布地域であるが、この地域の中心が摂関家一条氏領幡多荘であったこと、そして御影石の産出地に重なる摂津国福原荘も、同じく一条家領荘園であったことから、一条氏を媒介にして、消費地(需要地)と生産地とが太いパイプで繋がっていたことが判明した。摂津兵庫津周辺から瀬戸内海運に乗り、豊後水道を経て幡多西海岸へ輸送されてきたことは明らかである。

実際、幡多荘域でも西岸部を中心にかなりの高密度で分布が認められ、一条氏ゆかりの寺社跡や遺跡にはほぼ例外のないほどに御影石製石造物が存在する。しかも、それらの加工技術・形態から見て、生産地から直接に輸送されてきたものであることもまた明らかとなった。

このことから、石造物生産の伝統がない幡多荘域に、一条氏やその関係者が関与しながら、畿内系石造物の代表である御影石製石造物がいち早く導入されたことが予想される。

(7)幡多地域の御影石製石造物は、鎌倉末期の 14 世紀初頭に搬入が開始され、15 世紀終わり頃まで大量に運び込まれた。その間 15 世紀半ば過ぎ頃から、地元産の砂岩を使用して、御影石のそれをコピーした石造物生産が開始され、16 世紀になると地域色のある石造物を発展させて、御影石製石造物を凌駕するようになる。

幡多地域には、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけて、和泉砂岩系の一石五輪塔の搬入が始まり、ほぼ同じ頃から御影石製の一石五輪塔も運び込まれるようになるが、大型の組み合わせ式五輪塔をはじめとする石塔類は、ほとんど影を潜めるようになっていく。

このように、幡多地域は、畿内系の御影石製石造物の搬入と、その在地化の過程が具体的に分かる好事例である。

(8)阿波東南部地域における御影石製石造物は、吉野川下流域から南下するにつれて、しだいにその数を増し、阿波最南部の海部川下流域で最も高密度の分布を見せる。しかも吉野川下流域は、14 世紀半ばから後半の細川氏関係者の特注品が散在するのに対し、その数が多い阿波南部地域は 15 世紀半ばから 16 世紀にかけてのものが多数を占め、海部城や海部氏の菩提寺周辺に集中するなど、水軍領主である海部氏との深い関連をうかがわせる。

海部周辺で御影石製石造物が出現し、増加する時期は、海部氏が守護細川氏に編成され、細川氏との関係を通じて畿内との通交・交易がよりスムースに行われるようになる時期と重なっており、この地域の移出品の代表である材木の返り荷の一つとして運ばれてきた可能性が高い。その輸送経路は大阪湾から紀淡海峡を南下するものであり、土佐幡多地域への御影石製石造物とは明らかに異なる航路をとっていた。

(9)御影石と他の花崗岩との識別は、色調・粒子・目視による包含鉱物の有り様、そして帯磁率の計測値、石工の系列による加工技術・形態の相違などによって、ある程度まで可能である。しかし、長門下関周辺の花崗岩との識別は極めて難しいことが明らかになった。非破壊による石材識別の限界である。

しかし、その一方で、加工技術の面から、御影石を中心に加工する石工が、下関周辺の他の石材を加工して、御影石製石造物と同じ形態の作品を造っていたことも明らかとなり、石工の移動や技術交流という新たな論点を見いだすこともできた。

(10)研究成果の一端は、冊子体による報告書『御影石製中世石造物の分布調査とその学際的研究』で紹介した(全 113 頁)。この報告書には、口絵にカラーで中世の主要な御影石製石造物や石材表面の近接写真などを掲載した上で、Ⅰ．研究題目・研究組織・研究の記録、Ⅱ．本研究の目的と概要、のほか、Ⅲ．本研究の諸成果、として以下のような諸論考を収録している。

【石材の識別と技術・形態論的検討】
佐藤亜聖「花崗岩加工技術の基礎資料－矢穴資料の整理と六甲産花崗岩利用の技術系譜－」
西山昌孝「石材と形態の組合せによる産出地識別」
遠藤　亮「六甲花崗岩の石切場と石質－御影石を色調・結晶・帯磁で見る－」
黒川信義「愛媛県における花崗岩製石造物の概要について」
海邉博史「中世前半期における御影石製宝篋印塔」

【御影石製石造物の分布とその特徴】
西山昌孝「中世前半の分布とその特徴」
松田朝由「中世御影石石造物における流通の展開とその特徴」
市村高男「中世四国における御影石製石造物の分布と流通経路」
大川沙織「中世阿波における花崗岩製石造物の受容」
原田昭一・江藤和幸「豊前・豊後における搬入された中世の花崗岩製石塔」

【御影石製石造物と宗教】
桃崎祐輔「北部九州の石造物と宗教－対外交渉と宗派的な特質について－」
福島金治「尾張国大須真福寺聖教にみる四国・九州への聖教伝播」
市村高男「人・物の動きから見た長門国下関(赤間関)の位置」
松田朝由「専念寺五輪塔と山口県の中世花崗岩石造物」

(11)それとは別に、本研究の一環として実施した愛媛県伊方町でのシンポジウム「石造物から見た中世の佐田岬半島」についても、同名の本として準備中であり、この７月か８月には刊行になる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①市村高男、戦国末期における下野那須衆の厳島社参詣－厳島神社蔵絵馬の墨書をめぐって－、栃木県立文書館紀要、査読無、第 15 号、2011、pp. 1-11
②佐藤亜聖、京都東山・長寿庵左阿弥所在五輪塔について、寺社と民衆、査読無、第６輯、2010、pp. 52－55
③市村高男、中世前期土佐の地域構造と権力配置－源希義とその周辺の考察から－、土佐史談、査読無、242 号、2009、pp. 41-64
④佐藤亜聖、中世石造物の普及をささえた技術、歴博、査読有、第 155 号、2009、pp. 6-10
⑤福島金治、中世後期南九州の村と町－「庄内地理志」を中心に－、地方史研究、査読有、2009、pp. 19-32
⑥市村高男、戦国都市中村の実像と土佐一条氏、西南四国歴史文化論叢よど、査読無、10 号、2009、pp. 1-18
⑦桃崎祐輔、中世棒状鉄素材に関する基礎的研究、七隈史学、査読有、第 10 号、2008、pp. 1-53

〔学会発表〕（計７件）
①福島金治、密教聖教の伝授・集積と隔地間交流－「坊津一乗院聖教類等」の検討を通して－、九州史学研究会大会、2010・10・16、九州大学

②桃崎祐輔、福岡周辺の中国系石造物研究の課題－寧波・梅園石製石造物搬入の実態と背景－、「寧波与福岡文化遺産保護検討交流」学術交流会、2010・8・30、寧波市文物考古研究所
③桃崎祐輔、中国の不明鉄製品は箙(えびら)か、福岡金属遺物談話会例会、2010・7・9、福岡大学
④桃崎祐輔、中国寧波・泉州南宋石造物の鉄鑿・楔痕跡と橋梁の鉄鎹、福岡金属遺物談話会例会、2010・4・9、福岡市埋蔵文化財センター
⑤佐藤亜聖、日本の石造物にみる中国の影響、金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト・国際シンポジウム、2009・11・29、石川県文協会館
⑥桃崎祐輔、北九州市大興善寺・福岡市大乗寺跡の鋳造関係遺物－西大寺末律宗寺院門前における中世鋳物師活動の実態、2009・1・16、福岡市埋蔵文化財センター
⑦佐藤亜聖、日本石造物、2008・11・21、中日石造物報告会、中国浙江省寧波仏教居士林開亭廟

〔図書〕（計９件）
①市村高男、他、岩田書院、戦国期下野の地域権力、2010、pp.23-64
②市村高男、他、高志書院、中世土佐の世界と一条氏、2010、pp.1-6、9-57、403-404
③福島金治、山川出版社、北条時宗と安達泰盛、2010、94
④市村高男、村井章介他、吉川弘文舘、日本の対外関係４倭寇と「日本国王」、2010、pp.286-298
⑤佐藤亜聖、他、金沢大学、国際シンポジウム石の匠－石工技術から探る日中交流－、2010、pp.33-44
⑥桃崎祐輔、他、福岡大学､福岡大学考古資料集成３福岡県糟屋郡若杉山麓の中世資料の調査－、2010、pp.5-24
⑦市村高男､他､岩田書院､港町の原像 上 中世讃岐と瀬戸内世界、2009、pp.199-234
⑧桃崎祐輔、他、西日本新聞社、歴史はおもしろい歴史学入門 12 のアプローチ、2009、pp. 93-108
⑨桃崎祐輔、他、久山町教育委員会、首羅山遺跡－福岡平野周縁の山岳寺院、2008、pp.41-64

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
市村　高男（ICHIMURA TAKAO ）
高知大学・教育研究部総合科学系・教授
研究者番号：80294817

(2)研究分担者
佐藤　亜聖（SATOU ASEI ）
(財)元興寺文化財研究所・研究部・研究員
研究者番号：40321947
福島 金治(FUKUSHIMA　KANEHARU)
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：70319177
桃埼　祐輔(MOMOSAKI　YUUSUKE)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号：60323218

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
遠藤　亮(ENDOU AKIRA)
香川県丸亀市文化財保護審議委員
大川　沙織(OHKAWA SAORI)
徳島県徳島市教育委員会
海邉　博史(KAIBE HIROSHI)
香川県善通寺市教育委員会
黒川　信義(KUROKAWA NOBUYOSHI)
(株)伊方サービス・石造物研究者
島田　豊彰(SHIMADA TOYOAKI)
徳島県埋蔵文化財センター
西山　昌孝(NISHIYAMA MASATAKA)
NPO 摂河泉地域文化研究所
西野　正勝(NISHINO MASAKATU)
佐賀県教育委員会
橋口　亘(HASHIGUCHI WATARU)
鹿児島県南さつま市教育委員会
松田　朝由(MATUDA TOMOYOSHI)
香川県大川広域行政組合総務課文化財係
山内　亮平(YAMAUCHI RYOUHEI)
福岡大学院生